

厚沢部川水系の水辺環境と河川資源を活用した地域に根ざした任意団体の活動

厚沢部町河川資源保護振興会

1. はじめに(会の概要と趣意)

厚沢部町河川資源保護振興会は、昭和47年に北海道檜山郡厚沢部町の有志により設立され、現在は47名の会員により事業活動が実施されています。厚沢部川水系の豊かな自然と水辺環境を活かし、子どもたちが水遊びを通して郷土の自然を学び、体験できる場として様々な自然体験型学習や啓蒙活動を行ってきました。また、地域住民が親しみ憩える水辺空間の実現と、多様性に満ちた生命のゆりかごとしての厚沢部川の大切な役割を損なうことなく、人と自然が共生する水辺空間を実現するため、厚沢部川に生息するカワヤツメやアユをはじめとする水産資源の保護・増殖、河川環境保全に努め、地域の活性化に寄与することを目的として、約半世紀にわたり地域の住民と共に活動しています。

2. 主な活動フィールド・厚沢部川水系について

2級河川厚沢部川水系は、北海道の南西部にある渡島半島の檜山・渡島の山々に源を発し、豊かな山、豊かな里、豊かな海と一体となって地域の住民に様々な恩恵をもたらしてきました。とりわけ、厚沢部町とその周辺に暮らす人々にとって身近な自然であり、憩いの場であるとともに、生活用水として、また、町の基幹産業である農業の根幹を成す大切な水資源として利用され、地域住民にとって生活と切り離すことの出来ない川となっています。

3. 主な活動の紹介

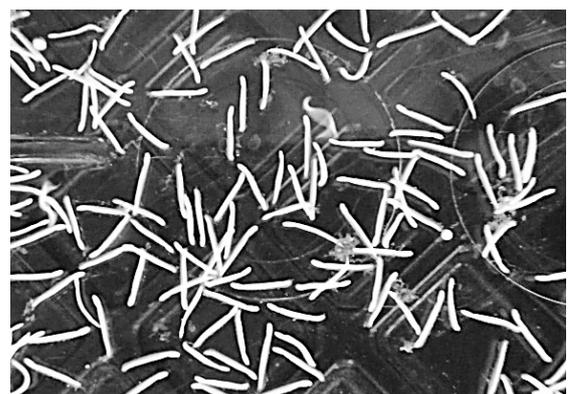
(1) 激減しているカワヤツメを増やそう! (人工種苗生産・放流・体験学習)

北海道の主だった河川流域の町では、古くからカワヤツメを食べる食文化が存在し、様々な郷土料理が伝承されてきました。しかし、近年、北海道の多くの河川でカワヤツメの生息数が激減しているとの声が聞かれるようになり。厚沢部川においても同様にカワヤツメ資源の減少が見られたことから、平成20年より、地方独

立行政法人北海道立総合研究機構さけます・内水面水産試験場の協力により、生息状況・産卵床の調査を行い、人工種苗の生産方法、放流方法などの知識と技術について指導を受けて、カワヤツメ資源の回復に向けた活動が始まりました。また、平成22年より、町内小学校の4年生に「カワヤツメの人工授精・里親飼育体験」の出前授業を始め、「ふる里の川・厚沢部川の自然とカワヤツメ」について学んでもらっています。ふる里の川の自然や河川環境、川の生き物について考える切掛けづくりになることを願い始めた事業です。平成30年度の人工種苗生産量は、約30万粒(ふ化率は約7割)で、孵化した約21万尾を厚沢部川の放流適地に放流しました。カワヤツメは、アンモニーテス幼生から成魚になり産卵するまで、6年から7年の期間を要すること、河川生活史・海洋生活史について、ほとんど研究されていないこと、放流後の生存調査を1度しか実施していないこ



採捕したカワヤツメの親魚



孵化したアンモニーテス幼生



平成22年に開催したカワヤツメ資源回復事業の報告会の様子（北海道各地から参加）

となど、放流効果の検証については、今後の大きな課題となっています。また、全国的に見ても、カワヤツメ資源回復の取り組み事例や参考となる文献が少ないため、北海道さけます・内水面水産試験場の協力・指導が事業活動の大きな手助けとなっています。

(2) 先ず、活動フィールドをきれいにしよう（河川美化活動）

活動のほとんどが厚沢部川で実施されているため、先ず、活動フィールドをきれいにしようと考え、厚沢部川の清掃（一部区間の河川敷及び水中のゴミ拾い）と俄虫橋下流の河川敷の草刈りを30年以上にわたって実施してきました。毎年の清掃作業では、プラゴミやビニール類のゴミが多く見られ、川や海の生き物への影響が心配される状況となっています。山（森林）、川、海は、生き物が行き来するだけではなく、ゴミもまた、山から川、川から海へと至り、自然界とそこに暮らす生き物に重大な被害を及ぼしていることを理解しなければなりません。そこで、このような状況を、事業活動や紙面を通して啓蒙する活動も同時に行っています。また、5年前より、厚沢部土地改良区の皆さんと共同で河川美化活動を実施するようになり、他の団体と連携した活動に発展しています。



川の中のゴミを拾う作業風景



集められたゴミ①



集められたゴミ②



休憩中の参加者

(3) 天然遡上のアユを増やすぞ! ① (稚アユの放流と地元小学生の稚アユ放流体験)

厚沢部川水系のアユ資源増殖を図るため、40年以上にわたって稚アユの放流を行ってきました。現在は、6月下旬に約1万匹の秋田県阿仁川人工産鮎 (F1~F3) を厚沢部川本・支流に放流しています。厚沢部川は、アユの友釣り河川として北海道内の友釣り愛好者の間で知られた河川で、ここ数年は、首都圏、大阪圏など本州各地からも友釣りファンが来町し、北限に位置する北海道のアユ釣りを楽しんでいます。夏のアユ釣り時期は、多くのアユ友釣り師で賑わい、厚沢部川の夏の風物詩となっています。また、宿泊する釣り客も多く、地域の活性化に繋がる活動として取り組んできました。し

かし、数年前に全国各地のアユの遺伝的特性を大規模に調査する初めての試みがなされ、北海道に生息するアユは、北海道独自の遺伝的特性を持つ個体群であることが判明したため、現在、北海道産以外の秋田県産アユを放流することについて検討を進めています。

昔から、厚沢部川は天然遡上のアユが多く生息し、町民憲章にも「鮎おどる厚沢部川」の一節が入れられるほど、地域住民にとり身近な存在であり、郷土の誇る自然の産物となっています。この大切な資源の保護と厚沢部川に生息する生き物を学んでもらい、多様な生き物と河川環境保全の大切さ、郷土の自然を考える切掛けづくりとなることを願い、地域の小学生を対象としたアユの放流体験も合わせて実施しています。



稚アユを積んだトラック



厚沢部小学校4年生による放流風景



放流適地に放流を実施



アユの観察後に放流実施



放流風景

(4) 天然遡上のアユを増やすぞ! ② (小学校4年生対象の人工授精・里親飼育体験授業とアユの人工種苗生産)

40年以上にわたり絶えることなく実施され、若い世代へと受け継がれて来た当会で最も歴史あり、誇ることのできる事業です。天然遡上のアユ親魚を特別採捕し、人工授精した卵をシュロ皮で作った孵化盆に塗布し、孵化盆20枚が入る孵化槽に入れて川の流れる場所に留置します。2週間ほどすると孵化し、孵化槽の網目から出て川の流れに乗り、川を下ります。この作業は、8

月末から9月の中旬にかけて数回に分けて実施します。平均的な孵化率は、80%～90%になります。平成30年度は約66万流の人工種苗を生産しました。また、地元の小学校4年生を対象にしたアユの人工授精・里親飼育体験を実施しています。小学校の授業とリンクした授業として実施され、20年以上の実績を積み重ねてきました。小学生の時に体験授業を受けた中学生や高校生から声を掛けられ、嬉しい思いをすることもあり、事業の成果が確実に広がりを見せていると実感しています。



アユの人工授精・里親飼育体験



カワヤツメ人工授精体験



アユ親魚の計測作業



カワヤツメ人工授精体験



カワヤツメ人工授精体験

(5) 天然遡上のアユを増やすぞ! ③ (アユの産卵場造成)

近年、天然遡上のアユの減少が全国的な問題となっています。厚沢部川の遡上は比較的安定しているものの河川環境の変化などにより、やはり減少傾向にあります。減少の原因は様々なことが考えられていますが、産卵場所の減少により、十分な産卵が行えないことも大きな原因と言われています。厚沢部川においても、産卵に適した水通しの良い砂礫底が減少していることが、会員の情報や実際の現地調査などより明らかになっています。そこで、レーキを使って川底の石を浮石状態にする小規模な産卵場造成を昨年より試験的に行っています。成果が判明すれば、河川管理者に申請して本格的な産卵場造成事業を開始したいと考えています。

(6) まちの名物として定着しつつある厚沢部川の美味しいアユ

地元の川で捕れるアユと厚沢部川の支流で養殖したアユを活用し、町の活性化に寄与しようと、30年ほど前からアユの養殖を始めました。アユ釣りを楽しむ釣り人のために、囲アユ(友釣りに必要な生きたアユのこと)を提供しています。また、厚沢部町最大のイベントである「あっさぶふるさと夏まつり」や、お盆に「道の

駅厚沢部」において開催する「あゆ祭り」に丹念に育てたアユの炭火塩焼きを販売しています。厚沢部川のアユはとても美味しいと、地元の住民はもとより、町外か

ら来られた多くの方に好評で、厚沢部町の新たな名物、観光資源として定着しつつあります。また、この事業で得た収益金は、事業活動の重要な財源となっています。

■ アユの人工孵化(人工種苗生産)事業

40余年の継続実績を誇る当会の事業

平成30年度は約66万粒の人工種苗を生産しました。



卵を搾る



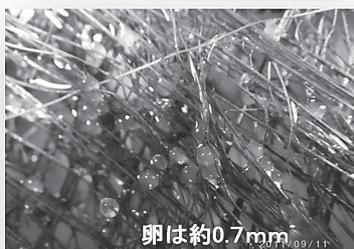
精子をかける



卵と精子を混ぜる



受精卵を孵化盆に塗布



卵は約0.7mm

孵化盆に塗布した受精卵



孵化盆を孵化槽に入れる

アユの人工種苗生産作業は、午後8時頃寒い中実施されます

アユの産卵場整備

- ・ 俄虫橋下流の瀬を鍬で耕し、鮎が産卵を行える環境づくりを実施。

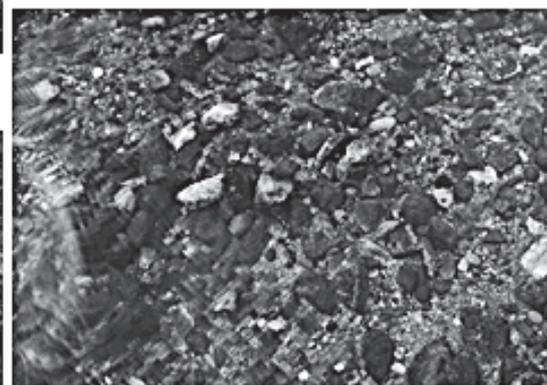


泥を被り固くしまった川底(砂礫底)



俄虫橋下流の瀬

耕したことにより礫の表面は綺麗になり、フカフカの状態になった川底





アユの炭火塩焼き



2018/07/22 11:30

(7) 厚沢部川で遊ぼう!(小学生・アユの友釣り体験教室・川の生き物観察会)

この事業は、厚沢部町教育委員会が主催する事業で、当会が主幹して開催されます。町内の小学生を対象に世界でも珍しい日本の伝統的釣法「アユの友釣り」と「川の生き物観察会」、昼食に炭火で焼く「アユの塩焼き」を実施し、ふる里の自然と伝統文化、地域の食文化に触れてもらうことを目的に開催されています。北海道においては、道南地域にのみアユが生息し、アユに関する文化も道南地域に限られています。この文化と自然に親しみ愛する心を、次世代を担う子どもたちに継承していきたい。そして、何よりも、ふる里の川の楽しい思い

出として記憶に残る活動としたいと願い実施してきました。



釣りあげたアユを確認!



開会式



アユの友釣り風景

(8) ふる里の川で思いっきり遊ぼう！(親子川釣り大会・川の生き物観察会)

昨年で第6回を数える比較的新しい事業で、町内外の親子ペアによる川釣り大会と川遊びを通し、川の生き物について学んでもらう事業となっています。町の中心を流れる厚沢部川の俄虫橋下流において開催され、RAC(川に遊ぶ体験活動協議会)から購入したライフジャケットを身に着けた子どもと親がペアになってエサ釣りで川魚を釣り上げ、ポイントで勝敗を決する大会となっています。毎年、ヤマメ、ウグイ、ウキゴリ、カジカ、ニジマスなど、たくさんの種類の魚が釣れ、子どもはもとより、大人も夢中になって厚沢部川の豊かな自然の恵みを楽しんでいます。大会終了後は、休憩を挟んで川の生き物観察会を行います。参加者は、タモ網、箱メガネ、水槽を持ち、魚や水生生物を捕るのに夢中になり、あっという間に昼食の時間になります。直径40cm以下の小さなタモ網で様々な生き物が捕まえられます。主なものを紹介すると、ヤマメ、ウグイ、ウキゴリ、カジカ類、マドジョウ、ギンブナ、カワヤツメの幼生、スナヤツメ、トゲウオの仲間、スジエビ、モクスガニ、カワシジユガイ、ミズカマキリ、カワトンボのヤゴなどのヤゴ類をはじめ、多種にわたる水生昆虫などが採捕され、観察箱に入れて生態などを説明します。採捕した生き物は、観察会終了後に川に戻します。



ライフジャケットを身に着け準備OK



川釣り大会開始

この事業には、厚沢部町が実施している「世界一素敵な過疎のまち・ちょっと暮らし住宅移住体験」で、都会から厚沢部町に移住体験している親子も参加し、「都会では味わえないとても貴重な体験が出来て楽しかった」と大好評です。ふる里の川の自然と親子の絆をテーマにした事業で、「とにかく楽しい思い出が心に残れば大成功」との会員の思いで実施しています。昼食のカレーとアユの炭火塩焼きも参加者に大好評です！

(9) 子どもにも大人にも大人気 河川資源展(ミニミニ水族館)の開催

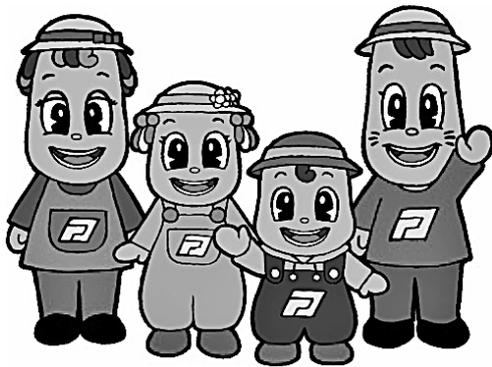
毎年11月3日に厚沢部町民文化祭が開催され、当会は、町総合体育館入口のエントランスで「河川資源展(ミニミニ水族館)」を開催しています。厚沢部川で採捕した生き物を水槽展示し、厚沢部川にどんな生き物が棲んでいて、その生き物はどんな生態で生きているのか生きている姿を見てもらうことにより、河川環境保全と河川資源に関心を持ってもらうことを目的として開催しています。「子どもの頃この魚採ったよ」と懐かしそうに話しかけてくるお年寄りや、楽しそうに水槽の魚を見ている子どもを見ていると、それだけでも河川資源展を実施した意味があったと思えます。毎年展示している主な生き物は、ヤマメ、アメマス(エゾイワナ)、ニジマス(国外外来魚)、ウグイ、アブラハヤ(国内外来魚)、カジカ類、マドジョウ、ギンブナ、コイ(国外外来魚)、トゲ



厚沢部川水系の生き物を水槽展示

ポテト王国へ。

函館から59km
新函館北斗駅から43km



厚沢部町イメージキャラクター「おらいもファミリー」



ウオ類、アユ、カワヤツメ（絶滅危惧Ⅱ類）、スナヤツメ（絶滅危惧Ⅱ類）、ウキゴリ、モクズガニ、スジエビ、ニホンザリガニ（絶滅危惧Ⅱ類）、カワシンジュガイ（絶滅危惧Ⅱ類）など、絶滅危惧種も含まれます。ニホンザリガニなどは、子どもたちが欲しがりますが、採った場所に返すことの意義を説明して理解してもらっています。展示した生き物は、展示終了後に川に戻します。

10. おわりに

地域に根差した任意団体が、約半世紀にわたり厚沢部川水系を活動フィールドとして、多様な活動を継続して実施してきました。生物多様性に富む厚沢部川水系の河川資源の保護・増殖活動を継続的に取り組み、未来を担う子どもたちには、ふるりの自然と河川環境保全の大切さを考える切掛けづくりとなる自然体験学習を実施してきました。また、地域の活性化に寄与するた

め、町内イベントへの参加と河川資源の継続的利用による観光資源化に取り組んできました。

昭和47年より約半世紀にわたり活動してきた過疎地の任意団体ですが、地域の人口減少と高齢化に伴い、会員数の減少、高齢化という問題を抱えています。地域住民の理解のもと行政、関係団と連携を図り、事業の継続に努めていきたいと考えています。

最後になりましたが、事業活動にご理解とご協力いただきました北海道、北海道立総合研究機構さけます・内水面水産試験場、北海道e-水プロジェクト、厚沢部町をはじめ、多くの行政機関や関係団体に紙面を借り心より感謝を申し上げます。

厚沢部町河川資源保護振興会